**説教20230730ローマ8：24-34マタイ13：31-33，44-50「天の国のたとえ」**

**天の国とはどんなところか、聖書には随所に記されています。聖書の最後にありますヨハネの黙示録には、天の国のありさまが、次の様に記されています。「見よ、神の幕屋が人の間にあって、神が人と共に住み、人は神の民となる。神は自ら人と共にいて、その神となり、彼らの目の涙をことごとくぬぐい取ってくださる。もはや死はなく、もはや悲しみも嘆きも労苦もない。最初のものは過ぎ去ったからである。」天の国では、悲しみも嘆きも労苦もないと主イエスは言われます。それは何と喜びと祝福に満ちた国なのでしょうか。全ての被造物が、父と子の親しい交わりの中に入れられ、憎しみあうことも、けなし合うことも、傷つけ合うこともなく一つとなって共存しているさまが想起されます。**

**この様な、すべてが完成し、永遠の祝福が成就している天の国を私たちは求めながらこの地上を一歩一歩、主イエスとともに前に歩んでいます。今日のロマ書に書いてある通り、私たちは確かに、天の国が目に見えないからこそ、その目に見えないものを、忍耐して待ち望むことが出来るのです。**

**とはいえ、私たちは、主イエスを信じて主イエスへの信仰を告白してこの地上を歩むとき、この地上にも、天の国が現れているのだと主イエスは言われます。マタイによる福音書18章20節に次の様に記されています。**

**「二人または三人がわたしの名によって集まるところには、わたしもその中にいるのである。」**

**教会と言うのはエクレシアというギリシャ語の訳で、元々は集まりという意味です。教会と言いますと、私たちは建物を備えた場所をイメージしますけれども、主イエスがいわれるように、たとえ建物はなくても、イエスへの信仰を告白して集まっている二人または三人の中にも、その信仰告白を土台として、そこに教会が形成され、この地上に天の国が現れるのだと、主イエスは言われます。**

**この様に、この地上の国と、天の国の間には、道が通じていて、その道とは、イエスキリストを信じて、信仰を告白しながら、イエスについていく道であるということが知らされます。そして、この教会と言う場所において、天の国と地の国とは、いわば混じり合って存在しているのです。**

**主イエスは私たちに、「何よりもまず、神の国と神の義を求めなさい。」と言われます。敢えて主イエスが私たちにこの様に言われるのは、私たちのこの地上での実際の歩みが、誘惑や苦難に会うと、たちまち主イエスの道から外れてしまう、如何に罪深いものであるかを御存じだからでありましょう。ですから、主イエスは「空の鳥をよく見なさい。野の花がどのように育つのか、注意して見なさい。」と言われて、この世での祝福された生き方を現実的に私たちに教えようとされています。空の鳥や野の花は、やがて地に落ちて朽ちてゆくのですが、そんな将来のことをあれこれと思い悩むことがありません。そのかわり、その命の一瞬一瞬を主イエスから養われ、守られ、祝福されて、その命を全うするのであります。**

**私たち人間は、全ての命の与え主である主イエスのことを、空の鳥や野の花よりもよく知ることが出来るのですから、主イエスの言葉を信じて、それを最後まで口づさむことによって、永遠の祝福がある天の国へと至ることが出来るのです。その道を歩む時、自分は死んでしまって何もなくなってしまうと言った罪深い思い悩みは払拭されていくことでしょう。**

**天の国と言うのは、教会と言う場所を通して、この地上の国とつながっている、混じり合っているということが、知らされましたが、今日の、マタイ福音書の聖書箇所で、主イエスは、天の国を沢山の物事に喩えて説明をされています。それは、この世にも現れている天の国を、私たちが現実的にどう歩み、又、隣人たちに天の国をどうやって告げ知らせていくのかということについての気づきを私たちに与える為でありましょう。**

**私は先週、携帯電話の乗り換えを致しました。或る電気屋さんの携帯電話会社のカウンターに赴いて、そこで、数時間の間、未だ20代の若い担当者の方と面談して、契約をすすめ、操作方法について教えて頂きました。その結果、私の携帯電話の料金は月々2500円程度安くなりました。それはそれでめでたいことですけれども、その喜びと言うのはたかが知れています。新しい機種になって、様々な利便性と効率性が追加されて、良かったですけれども、その喜びもたかが知れています。**

**私は、この若い担当者が、この様な契約の仕事をこの先ずっと続けていくのも空しかろうと、少々、同情と憐みの念を持ちつつ、雑談に興じることにしました。相手がしゃべりたいことに耳を傾けるという姿勢で、私たちは向き合って対話をしていきましたが、そうしますと、自分の出身地や出身校、今の仕事をどう思っているか、など、雑談が発展していき、なかなか充実して祝福された数時間を過ごすことが出来ました。そして、最後に別府不老町教会の場所と集会案内、連絡先やホームページのことをお知らせしてお別れすることが出来ました。**

**何でこんな話をしたかと言いますと、携帯電話会社のカウンターという普通に考えれば、天の国とも教会とも、全然関係がないだろうなあと思われる場所でも、私たちは、信仰を持って臨み、一つ一つの思いと言葉と行いに気を付けて、相手と対したならば、そこにも、天の国の種を蒔くことが出来るのだなあということに気付かされたからです。このように、天の国は、私たちの生活のいたるところで、告げ知らされ、そして実現されるようにと、実は私たちを取り巻いているのであります。**

**それでは主イエスのたとえ話を聞きましょう。**

**マタイによる福音書 13章 31節から**

**イエスは、別のたとえを持ち出して、彼らに言われた。「天の国はからし種に似ている。人がこれを取って畑に蒔けば、どんな種よりも小さいのに、成長するとどの野菜よりも大きくなり、空の鳥が来て枝に巣を作るほどの木になる。」**

**天の国を待ち望んでいる私たちは、同時に、主イエスから天の国の種を蒔きなさいと言われています。このたとえは農夫の生活に即していますが、農夫もその日々の生活や仕事の中で、天の国を告げ知らせるという種蒔きを担うことが出来るのです。**

**33節～**

**また、別のたとえをお話しになった。「天の国はパン種に似ている。女がこれを取って三サトンの粉に混ぜると、やがて全体が膨れる。」**

**このたとえ話では主イエスは、日常の料理の場面によって語っています。粉にパン種を混ぜるという料理の作業は、そのころ毎日誰もが行っていたことでありましょう。そんな日常の作業に喩えられるほどに、天の国と言うのも、私たちの普段の生活に迫ってきており、私たちは、天の国を述べ伝えるチャンスを与えられているということでしょう。**

**そして以上の二つのたとえ話では、小さな事がやがて大きなことへと展開して発展をしていく事が語られています。つまり、私たちは、ことあるごとに隣り人達に天の国を述べ伝えていきますけれども、その一つ一つの業は誠に小さな業であります。教会の連絡先を渡したからといって連絡が来るかどうかはわかりません。最初からそこに大きな期待を抱いてもそれは無駄な事でありましょう。むしろ私たちは、その種蒔きという自分に託された小さな業の一つひとつを楽しみながら絶えず行い、いつ来るかわからない収穫の時を待ち望むことが、主イエスの御心なのでしょう。**

**少し飛んで44節から**

**「天の国は次のようにたとえられる。畑に宝が隠されている。見つけた人は、そのまま隠しておき、喜びながら帰り、持ち物をすっかり売り払って、その畑を買う。」**

**この地上の国において、お金と言うのは大切な役割を果たしています。しかしお金が良い目的のために働けばよいのですが、時として悪い目的や、私利私欲のため、或いはお金自体が偶像となって、悪く働いてしまうことが起こっています。主イエスはこの喩えで、天の国が建てられるためにお金が使われるという、究極的な良いお金の使い道と働きについて語っておられます。**

**45節から**

**また、天の国は次のようにたとえられる。商人が良い真珠を探している。高価な真珠を一つ見つけると、出かけて行って持ち物をすっかり売り払い、それを買う。**

**16世紀にはじまった私たちのプロテスタント教会は、この地上にあって、それぞれの人々に与えられた職業を、その中身によって差別したり、蔑視することがありませんでした。中世ヨーロッパでのように、銀行業は欲深い商売だと言って蔑視して、それに携わる人を差別したりはしませんでした。私たちは、この地上で、それぞれに相応しい職業を神から与えられ、その仕事を御心に適って全うすることこそ大事なことであると考えました。**

**聖書に立ち帰って主イエスの言葉を聞きますと、主イエスは商人を、決して劣った職業であるとは言われていないことが判ります。商人もまた、天の国の良さを知り、天の国に全てを投資してそれを求める時に、祝福されるのだと主イエスは言われます。**

**最後に47節から**

**また、天の国は次のようにたとえられる。網が湖に投げ降ろされ、いろいろな魚を集める。網がいっぱいになると、人々は岸に引き上げ、座って、良いものは器に入れ、悪いものは投げ捨てる。**

**このたとえ話では、漁師の仕事が喩えられています。そして、このたとえ話には今までの話には無かった新しい要素が加えられています。**

**それは選びという問題です。この最後の喩えで、主イエスは、私たちが主に選ばれて、天の国に入れられるのはどういうことなのかについて語っておられます。**

**先ず、喩えの内容を見て参りましょう。漁師はとにかくいろいろな魚を集めます。網一杯に集められた魚たちを、漁師は自分たちから見て、良い魚と悪い魚とを選別するのです。漁師は、一つ一つの魚を素早く吟味して、これは取り、あれは捨てるという取捨選択の判断をするのです。**

**そして、世の終わりに、私たちが主の前に立つ時は、天使たちが来て、正しい人々の中にいる悪い者どもをより分け、燃え盛る炉の中に投げ込むのである。悪い者どもは、そこで泣きわめいて歯ぎしりするだろう。」と主イエスは言われます。**

**この時に正しい人、悪い人の選別をするのは一体誰でしょう。それは、漁師でもなければ人間でもありません。その選別をするのは主イエス御自身です。**

**私たちは時としてこの様な、恐れおおい神の言葉についていけず、この地上の誘惑や偶像のほうにそれて行ってしまうことがあります。私たちが感じるこのおそれとは、十字架に一歩一歩近づいていく時に、その苦しみや辱めから逃げようとして主イエスを離れてしまう一人一人の罪に根差しています。**

**しかし、私たちが更に深く主イエスのことを知り、イエスが従順に十字架に架かって、自分自身が苦しんで辱めを受けて死なれて、それから復活をされて、私たちに出会われたということ。私たちが罪に縛られている処から私たちを解放され、罪の赦しを宣言して無罪とされることを、主イエスは最後まで願われているのだということを知る必要があります。**

**天の国に入るには、主イエス・キリストの道以外は無いのです。私たち自身が善悪の判断を下すことは出来ません。私たちは、いつでも罪の赦しを宣言し私たちを無罪として下さるイエスキリストから、最後まで決して離れることなく、その御言葉に聞き続けて参りたいと願います。**

**お祈り**

**主よ、あなたは天の国より、御子イエスを、この地上に下し、人となり、私たちと共に歩むようにされました。その深い憐れみと慈しみに感謝と賛美を捧げます。**

**御子イエスはこの地上にあっても私たちに、天の国を下さり、共にいてくだいます。その幸いを私たちがこの口を通して、隣人たちに宣べ伝えていく事が出来ますように。**

**私たちがこの地上で行う小さな業の一つひとつをあなたが豊かに用いて祝福して下さい。折が良くても悪くても、私たちをあなたに従う幸いな者とし、あなたによる奇跡の御業を、常に待ち望む者として下さい。**

**暑さの中で苦しんでいる方々一人一人に、安息の場所と、救いの御言葉をお与えください。いさかいごとに熱くなる私たちの罪を赦し、安心してあなたの御手のうちに安らうことが出来ますように。**